

内 容 目 次

はじめに	3
Ⅰ 天安門事件に始まった世界激動の波	3
(1) 東欧諸国を救った中国の悲劇	3
(2) 社会主義諸国に起っている地殻変動	5
Ⅱ 徹底的な恐怖政治を断行している中国の実情	7
(1) 天安門事件逮捕者処分にみられるアメとムチ	7
(2) 人民武装警察部隊による警備態勢	8
(3) 学生運動抑圧の実例	10
(4) 弾圧を続ける当局にショックを与えた三つの事件	11
(i) 柴玲の国外脱出	11
(ii) 許家屯の米国への亡命	12
(iii) 北京大学に於ける民主化集会	13
Ⅲ 中国が直面する諸問題	13
(1) 失業者の増大——潜在失業者一億	13
(2) 国家財政危機	14
(3) インフレ・オーバーキルの悪循環	15

#### IV 天安門の悲劇を超えて21世紀への展望

- (1) 天安門事件の本質……………15
- (2) 現体制の不安定要因は指導層の高齢化……………18
- (3) 現体制を揺さぶる二つの外部的要因……………19
  - (i) 社会主義体制崩壊の世界的潮流……………19
  - (ii) 台湾、香港に於ける経済的活力の昂揚……………20
- (4) 中国に於ける農民社会と改革の関係……………21
- (5) 噴出して来た少数民族問題……………22
- (6) 中華人民共和国から中華連邦共和国へ……………23
  - 統一のシンボルは孫文——……………23

#### V 中国を取り巻く厳しい国際環境

- (1) 对中国制裁に関する米国と日本の相違……………23
- (2) 日本の改正入管法の問題点……………24

#### VI 無気味な程の超安定の北朝鮮

- (1) 金日成を教祖にした新興宗教の世界……………25
- (2) チュチェ思想の根底は儒教的権威主義……………25
- (3) 北朝鮮のイメージはサナトリウム国家……………28
- (4) 容易に崩れそうもない現体制の北朝鮮……………27
  - 金正日が狙うソフト・ランディング——……………30

#### 質疑応答

32

#### はじめに

本日は私の専門である中国の最近の情勢をお話しするわけですが、偶々私は五月の連休に日本国際政治学会訪朝団の団長として、私を含めて八人の東アジア専門家と共に朝鮮民主主義人民共和国の平壤に一週間滞在しましたので、そのことを含めてお話をさせて頂きたいと思います。韓国には屢々足を運んでおりますが、ご案内のように我が国と北朝鮮との間には国交がないことから、特に公務員などは北朝鮮への旅行がしにくいこともありまして、私にとりましても初めての平壤訪問であったわけです。

#### I 天安門事件に始まった世界激動の波

##### (1) 東欧諸国を救った中国の悲劇

ご案内のように天安門事件が起こってから世界は物凄く大きく変化したと思います。去年の六月四日の天安門事件は大変な悲劇に終わったわけですが、或る意味ではあの事件によって中国は世界が変化する、つまり社会主義自身が生まれ変わろうとする潮流を再び逃したことになると思います。中国は恐らく約百年ぐらいロスをしてしまったのではないかと思います。つまり戦後の経済成長期に人民公社、大躍進政策をとり、それからその成長が最も急速であった六〇年代後半から七〇年代にかけて、アジアNIEsの国々がテイク・オフから先進国へのキャッチ・アップを始めた時期に中国は文化大革命を行い、このために恐らく二、三十年のロスをしたと思うのです。そして今また東欧諸国やソ連や或いはモンゴルまで大きく従来の政治システムを根本的に変えるという地

殻変動が起こっているわけですが、中国自身は自らそれを拒否しています。ということで、合計すると百年近いロスをしてしまったと私は考えているわけです。

いづれにしても、この天安門事件が或る意味では一つの悲劇的な代償となりました。東欧諸国を救ったといつてもいいと思うのです。私は、天安門事件後、「中国の悲劇」（講談社）という本を書き下ろしまして、その直後に東ヨーロッパに参りました。特にマルクスゆかりの東ベルリンのフンボルト大学では天安門事件についてのセミナーをやったわけですが、東ヨーロッパの学者達は天安門事件に非常に関心を示したのみならず、ひょっとするとこの国にも天安門事件が起きはしないかという或る意味では真剣な眼差しがそこに感じられました。当時東ドイツはまだホネッカー独裁体制下にありまして、天安門事件の武力弾圧をまっ先に支持した東ヨーロッパの最も強硬な指導者でした。天安門事件武力弾圧に対するあとの支持者はご承知のようにルーマニアのチャウシェスクと北朝鮮の金日成主席でした。そういう状況がありまして、既に東ドイツから西ドイツへの避難民が出ておりましたし、ベルリンの壁の崩壊する直前でありましたけれども、こういう雰囲気を考えますと、中国では悲劇に終わったけれどもこの悲劇を絶対に自分達は繰り返してはならないという一つの教訓として、東ヨーロッパに於いては民衆の側、つまり反乱に立ち上がった人達も、それから当局の側も共に天安門事件を深刻に受け止めていたのだらうと思います。そのことを十分に受け止めなかったルーマニアだけがああいふ血の犠牲を再び強いられたという気がします。

ですから、私は中国の民主化運動は天安門事件という悲劇を招いたけれども、それを一つの代償として東ヨーロッパが急速に解体した時にルーマニア以外は一滴の血を流すこともなく、いわば共産党の指導者が自ら城を明け渡すというまさかと思われたことが相次いで起こりました。そういう連鎖反応を非常に注目しています。そう

いう意味では先程も言いましたように中国の悲劇、天安門事件が東ヨーロッパを救ったと言っても過言ではないのではないかと思います。

## (2) 社会主義諸国に起っている地殻変動

この動きはご承知のようにその後ソ連の国内の動きにもつながってきております。ベレストロイカやグラスノスチを進めるゴルバチョフの政治、そしてそれをまだ生ぬるいと言って、もっとラディカルに民主化を進めようとする今回ロシア共和国の最高指導者になったエリツィンのような急進改革派の動きが活発化しております。ソ連に於いては嘗てはゴルバチョフを中心にしてリガチョフ等の保守派の勢力がありましたけれども、最近のロシア共和国に於けるエリツィンの勝利に見られるように、今後ゴルバチョフは保守派よりも寧ろ急進改革派の方に引張られる形でソ連自体の改革を進めなければいけなくなると思います。

こういう動きが案内のように、中国のすぐ隣のモンゴル人民共和国に迄波及して来たのです。モンゴルというと、ソ連の十六番目の共和国ではないかと言われたぐらいソ連の影響の強い所でありましたし、またどうしてこんなふうになってしまったかと思われるようにイデオロギー的に硬直した教条主義の立場をとっております。私も二回モンゴルに足を踏み入れておりますけれども、モンゴルの学問の殿堂である科学アカデミーの前には、ソ連でも見られないようなスターリンの銅像が立っていたのです。その一事を以てしてもモンゴルに於ける学問とか思想の自由というものはなかったわけですが、そのモンゴルが急速に変わって来ました。そしてあのスターリンの銅像が打ち壊されました。そして最近ではジンギスカンを評価する動きが出て来たのみならず、モンゴル自身が複数政党政制を取り始めて従来の一党独裁体制を一挙に捨て去ったのです。これからはモンゴルが非常に面

白くなると思います。

ご承知のように歴史的にも文化的にも地理的にもモンゴルというのはユーラシア大陸全体に色々な足跡を残しておりますし、言語学の上でもアルタイ語系統としてトルコ辺りからモンゴルに至るまで一つの言語圏を作っています。こういう所がソ連の中の少数民族地域などとずっと絡んでいまして、そういう意味ではソ連自身が非常に色彩感覚豊かなカラフルな状況になってきたということです。嘗てのようにソ連というところと灰色一色のトーンから、最近のソ連では実にエスニックな問題、つまり民族とか人種が非常にカラフルになって来てます。そしてそれに絡んでいるモンゴルが非常に大きく動いてきているということです。そこ迄今社会主義の世界は大きな地殻変動を起こしています。

そうしますと中国に発し、東ヨーロッパ、ソ連、モンゴルを経た一つの民主化、自由化運動の波がもう一遍中国に波及するのは何時かという問題が当然これからの大きな課題になります。それは最後に中国にも波及するだろうけれども、金日成独裁体制或いは家父長体制をとっている北朝鮮、チャウシェスクのルーマニア以上の個人崇拜体制をとっている金日成指導下の北朝鮮に波及すれば、一つのドラマが完結するわけです。私は、この動きを「一九八九—九〇年革命」と最近呼んでいます。恐らく二十一世紀の歴史家は、非常に大きな歴史の転換期として現在の状況を記すと思うのですけれども、これは正に嘗てヨーロッパにおける一八四八年の革命が連鎖反応のように起こったように、それが北朝鮮に迄起これば一つのドラマが完結するという期待、或いは推測があると思うのです。

実はそういうふうに私も思って平壤を訪れたわけです。ところが、実は結論は一寸違うのではないかとこのように申し上げざるを得ないわけです。つまり現在の北朝鮮は或る意味では不気味な程に金日成独裁体制下に於い

て超安定と言ってよいのではないのでしょうか。崩れ始めたなら大変なことになりますけれども、少なくとも中国のように乱れてはいないという感じが致しまして、私にとっては大変意外な所でした。

さて、そういうようなことを全般的に概観した上で、これから少し個別的に問題を掘り下げてみたいと思います。

## Ⅱ 徹底的な恐怖政治を断行している中国の実情

### (1) 天安門事件逮捕者処分にみられるアメとムチ

まず天安門事件後一周年の中国ですが、今日の中国は依然として徹底的な恐怖政治を断行していると言っているのではないかと思います。一方ではご承知のように天安門事件の逮捕者をこのところ三次にわたって釈放しています。合計七百数十名ぐらいいになったと思います。逆にそれはあの事件でそれだけの人が捕まえたのかという事なのですけれども、では一体どれだけの人が逮捕されたのかということと、数千人やいはもっと多いのではないかと言われていた中でこのところ何人かの逮捕者を釈放しているということと、その中にはご承知のように民主化運動でかなり活躍した人も含まれています。

『光明日報』という新聞が中国にあります。『人民日報』が中国共産党の機関紙であるということに對しまして、『光明日報』は嘗ては民主諸党派の機関紙で、最近は一一般紙に近いものになりました。その『光明日報』の記者として活躍した戴晴という女性の記者がおります。彼女はパリへ逃げた柴玲ほどではないけれども、一つの民主化運動の旗頭であったわけで、彼女なども釈放されております。一方でそういう緩和措置をとっていることは

事実です。

ところが他方では最近も裁判で次々に判決が出ておりまして、中国の政法大学の陳という教授は昨年、天安門広場においていて学生達と一緒にマイクを握ったというだけで懲役十五年という非常に重い刑を課せられているわけです。ですから言ってみればアメとムチを使い分けているわけですが、然しながら全般的には物凄い警備態勢をとっていると言っているでしょう。

## (2) 人民武装警察部隊による警備態勢

ご承知のように、中国では今人民武装警察部隊が全面的に治安、公安関係を担い始めました。人民武装警察部隊というのは、日本でいうと警察庁と防衛庁の間に存在するような機関でこれが治安、公安を担当していると思っております。細かいことは私共でもよく分からない所が多いのですが、言わば人民解放軍と公安部（警察）との中間的な組織です。ところで、ご承知のように天安門事件の時は人民解放軍（正規軍）が弾圧しましたが、それ以後の戒厳令体制下に於いては、特に昨年十一月一日からは人民武装警察部隊が全面的に治安を担うようになりました。ところが、これが人民解放軍の兵隊と区別がつきにくいのです。私も天安門事件以降二回中国へ行きましたし、ついこの間も平壤へ行く前後北京に滞在しましたけれども、外から見ていると、カーキ色の服を着ておられますし、腰にピストルをつけていますから分かりにくいのです。この人民武装警察部隊が中国全体で百万近くもいると見ております。特に人民解放軍の兵力削減によって退役した人達を大分人民武装警察部隊に編入しているようです。そしてこの人民武装警察部隊によって徹底的な締め付けをやっている、北京ではどんなことがあってももう反乱は起こさせないという態勢をとっているわけです。

例えばどういふことかと言いますと、これは私自身が目撃し、或いは私のみが目撃したことだと思えますが、写真も撮って来ましたが、五月四日、私が平壤から北京に戻って来まして、その日の夕方七時から日本の中国大使館の公使が私共を宴会に招いてくれたときのことです。夕方天安門広場を見てみようと思つたのです。というのはその日は五月四日、つまり五・四運動の記念日だからでした。昨年の五月四日は五・四運動七十周年記念ということで、丁度アジア開発銀行の総会が開かれて台湾からは大蔵大臣の郭婉容女史が行つて大変人気を得たり、それから趙紫陽が、アジア開発銀行の総会で演説しました。これが趙紫陽の五・四講話と言われまして、その中で、沿海地区経済発展戦略、つまり台湾や香港と協力して開放政策を進めるのだということを言うと同時に、広場にいる学生達は決して反乱分子ではない、暴乱分子ではない、彼らは愛國的な憂国の青年達だ、と言っているのです。それが趙紫陽の罪状になっていくわけです。

そんなことがあつた一年後ですから私も天安門広場に行つてみようと思つたわけです。私は広場へ行つてみたのですけれども、勿論そこには反乱の形跡はありませんでした。そこにはメーデーの直後に掲げられた孫文の大きな肖像が広場に残っていたり、或いは五・四運動の祝いをやった赤旗があちこちにあつたりするぐらいの程度だったので、ご承知のように天安門を挟んで天安門から向かつて右側に人民大会堂の建物があり左側には革命博物館があります。革命博物館の方は未だに閉鎖されています。人民武装警察部隊や人民解放軍の兵隊達の宿舎になっております。広場にはタクシーに乗って行きました、タクシーの運転手に一寸写真を撮りたいのだと言つたら気をきかして人民大会堂の前で右折して、私を入れて写真を撮ってくれると言うので車をストップしたので、そしたらたちまち公安部員、つまり警官に咎められましてそこは右折してはいけない所だということでタクシーの運転手はすぐ免許証を取り上げられたまま二、三十分帰つてこないのです。私は一人で人民大会堂の南側

の所で待つておりました。私の所にも尋問が来たわけです。私自身中国へ行くのに最初はビザが出ないというところがあつたりしたので、少し緊張していたわけですが、そうしたところが、何処からともなく数十名の人民武装警察部隊が私の目の前に現われるのです。そして隊列を組んで天安門広場を横切つて革命博物館の方へ消えていく。そしてあれよと思つていたらまた数十名が出てくる。そしてまた数十名と、まるで手品をやっているように次々に数十名の隊列を組んだ人民武装警察部隊の梯団が、現われるのです。五月四日の午後六時半〜七時ぐらいの間はまだ北京は明るいのです。私は車の中からそつとこの状況を隠し撮りしまして二枚ばかり写真があります。そして後で大使館の人達にそのことを話したのですが、これは非常に貴重な経験ではあるようです。というのは、この日、若し何かあつたらすぐに人民武装警察部隊が出てきて天安門広場を制圧する、そこでデモでもあれば捕まえるという態勢を作っていたらしいのです。私は北京の地理にはかなり詳しいのですが、どうもその人民大会堂の南側の辺りに地下道の出口があるらしいのです。つまり、広場の下から中南海まで通じている地下道がありまして、あの一帯でもし不穏なことがあつたらいつでも出てこれるように、地下道もしくは人民大会堂の中に大勢の人民武装警察部隊が待つていたのだらうと思ひます。それがその日一日何もなかったというので宿舎である革命博物館の方へ移動するその場面を偶々私は目撃したということです。もうその頃は外国人は殆どいませんでしたし、非常に貴重な体験を致しました。それは今の中国の状況の一端を、少なくとも北京に関する限りは私が言つたような状況があるということを示していると思ひます。

### (3) 学生運動抑圧の実例

現に新聞も報道しておりましたように、北京大学は昨年の後半から新学期が始まりましたが、一年生は全部石

家庄の軍事キャンプに行つていて、大学のキャンパスには一年生はいないのです。それがこの間五月の初旬に久し振りに人民解放軍の軍服を着た北京大学の新生がキャンパスに戻つてきたというのでニュースになっておりました。しかしながら彼らはまた元の所へ連れられて行つてしまいました。新生がいなく大学のキャンパス、新入生全部に軍事教練をしているキャンパスということ自体が異様なことです。それからもう一つの拠点大学であつた北京師範大学では、朝から晩まで農業労働に学生をかりだしており、また大学と広場との距離も離れておりますから、とても彼らは天安門事件一周年を目指して五月から六月にかけて、学校が終わつてから広場に行くことが出来ないような態勢を強制しているわけです。その他の大学もほほ同じような状況です。

### (4) 弾圧を続ける当局にショックを与えた三つの事件

#### (i) 柴玲の国外脱出

そうした中で中国当局にとって非常にショックな三つの事件が起こつたのです。一つはご承知のように中国民主化運動の正に旗手として注目された北京師範大学の柴玲女史がパリに亡命したことです。これは中国当局にとって非常にショックだつたと思うのです。彼女は亡命してから、ご承知のようにアメリカで副大統領とも会つたり、アメリカでもスターになっております。

では何故彼女は脱出できたのか。これは何れ明らかにされると思ひますけれど、現在中国では徹底的な警備体制をとつているわけです。つまり、末端は町では居民委員会、或いは農村においては村民委員会という一種の隣組組織から始めまして、絨毯作戦で徹底的な警戒体制をとつていたにもかかわらず、兎に角顔立ちも目立つ柴玲がその網の目をくぐつて亡命したのです。その前に去年にはウーアールカイシというウイグル族の活動家が脱出

しています。私は、彼とは東京で二回会いまして、中央公論で座談会もやっています。何れにしましても、彼は後にハーバード大学へ行ったわけですが、彼も顔がすぐ分かるのによく逃れることができました。これには、やはり彼らの亡命を補助する言わば地下組織があるのです。これが正に地縁、血縁のネットワークともなり、反政府運動のネットワークとなって、今日の中国でますます広がり、また深まりつつあるのではないかと私は思っています。従って民主化運動は物凄い敵しい抑圧の中にあるけれども、決して民主化の火は消えずというのが当面の中国の情勢だと思えます。そうでなければ柴玲が逃げられるということはない。これは具体的なディテイルも私も若干聞いておりますけれども、何れにしても政府内部の人の協力がなければ、彼女は絶対逃げられなかったということだけは申し上げておきます。

### (ii) 許家屯の米国への亡命

それから二番目の事件はご承知のように許家屯がアメリカへ実質上の亡命をしたということです。許家屯といえば香港に詳しい人は誰でも知っているように香港に於ける北京の代理人として、つまり香港の新華社の社長として権勢を振るった人です。彼と光大実業の王光英が香港に出てきて、香港は正に、香港返還問題と絡んでいよいよ中国共産党の支配下に置かれる。その象徴的な人物として正に許家屯という存在がありました。ところが彼は鄧小平や中国当局に無断でアメリカへ出国してしまつたのです。初めは否定していましたが、結局これは一種の亡命でした。この事件は中国にとっても香港の将来を考えますること、面子が全く潰されたと言っているのではないのでしょうか。これは非常に衝撃的なことだと思えます。

### (iii) 北京大学に於ける民主化集会

それから三つ目はあれ程に厳格な警戒体制をとっていながら、結局六月四日、たいした規模ではなかったけれども、北京大学で再び民主化を求める集会が開かれたということです。規模は多く見て三千名と言いますが、けれども、そんなにはいなかったという報道もあります。それで当局を刺激しない為にそこで解散したというのも、新入生を軍事訓練に持っていたにもかかわらず学生達の集会が開かれたということです。これは今の中国当局にとっては大変な衝撃ではなかったかと私は見えます。

ということを考えますと、これ程の警戒体制をとり、恐怖政治を断行しているにもかかわらず、これらの事件が起こっている。若しどこか箍がゆるんだ時にどうなるかという問題が当然出てくるわけです。

## III 中国が直面する諸問題

### (1) 失業者の増大——潜在失業者一億

そこで当面の中国について問題点を指摘致しますと、まず最近一番目立っていることは失業者の増大です。潜在的な失業人口と言ってもいいですが、七、八千万と見られていたのですけれども、最近では一億に達しています。実は平壤からの帰りに北京で旧知のアメリカ大使のジェームス・リリーと会いました時にリリー大使もそう言っていました。この一億の失業者が中国中をあちこちほっつき歩いているわけです。少しでもカネが稼げる所があるとそこへ押しかけていく。例えば昨年旧正月に広州へ押しかけた数百万の流民達——盲流と言っています——が、いざとなれば潜在的な難民としてどこへでも行くということです。日本に來た偽装難民の一部も

そうだと見ていいわけですが、そういう流動人口が全人口の約十%近く存在しているということです。これは社会不安の大きな原因になるわけです。嘗ての太平天国の革命で正にそういう流民があれだけ大きな力を持ったという歴史もあるだけに無視出来ません。

## (2) 国家財政危機

それから二番目が国家財政の危機が依然として続いているということです。特に今年から中国は対外債務の返債を迫られております。私は対外累積債務を四百数十億米ドルと推定したことがありますが、そんなにはないという人もいましたけれども、結局中国当局が四百億米ドルを越えるということを認めました。去年の十一月に中国のCTIC（中国信託投資公司）で議論した時にも中国側は一九九〇年だけでも七、八十億米ドル返さなければいけないと言っていました。九二年が約百億米ドルでピークだと言われてますけれども、こういう問題に中国は直面しています。ですから、円借款の凍結解除などはいかに中国にとって必要な課題かということがよく分かります。ご承知のように円借款は二・五%長期延払という中国にとっては本当に有難い借款なのですが、中国の対外債務は円借款のような有利な借款だけではなくて、全般的に高い金利のものも借りているわけです。そういうものを兎に角返していかなければいけない。そこで、デフォルトはあるかという話がありますけれども、その危険も無きにしても非ずです。デット・サービス・レシオは今後さらに悪化する可能性があります。つまり中国の貿易収支は非常に悪いのです。そこにもって来て開放経済とか自由化で地方の会社に経済権限が分権化されそこに日本の銀行はカネ余り現象ですから融資した。そういうものが焦げ付いてしまつて実際にはデフォルトに近い状況が出ているというケースも幾つかあるということです。こういう問題が今後どうなるかということです。

## (3) インフレ・オーバーキルの悪循環

それからインフレはご承知のように徹底的な引き締め政策の為にこのところ抑えられております。ただオーバーキルになってしまいました。中国経済はガタガタに落ち込んでしまったわけです。それで今度はこれを緩和しようということ、この春の人民代表大会で李鵬は従来の政策を再び転換して経済の緩和を強調しております。そうなりますとまたインフレになるという可能性も出て来ます。

それから国家財政の慢性的な危機と外貨不足は依然として続いておりますから、嘗てやったように人民元をどんどん刷ってそれを補填することになりますと再びインフレになる傾向があります。ということで経済環境は決して良くないです。

そこへもってきて貿易が伸びない。外貨不足が深刻ですから輸入が非常に停滞している。日中貿易も中国が我が国の政策的配慮もあり一生懸命対日輸出をやっておりますけれども、日本の対中国輸出はこのところ四〇%近く激減しているわけです。こういう問題が一方にあるのです。

## IV 天安門の悲劇を超えて21世紀への展望

### (1) 天安門事件の本質

現在政治の上でも物凄い引き締めをやっています。経済環境も良くない。これで果たして中国の民衆がついてくるかどうかということなのです。今は兎に角強権政治で抑えています。そうすると益々、大衆の中国共産党に対する不満は募るといふことになると思います。ですから基本的には何か大きなきっかけがあった時にいつ中

国は再び爆発するから分らないと考えていいのではないでしょう。そして今度爆発する時には恐らく天安門事件という教訓がありますから、学生や知識人は今度は軽率妄動はしないで政府を打倒しようというところまでいくかもしれません。そうしますと党や政府の中からも色々な亀裂が出てくる可能性があります。現に昨年の中国の民主化運動、天安門事件がなぜ深刻であったのかというのは単なる民主化運動ではなかったということです。

ここで天安門事件について二つのことを是非確認して欲しいのです。一つは民主化運動があれ程昂揚したわけですが、それは何を求めていたかという点、決して無理なことを求めたわけではないのです。憲法や党規約に基づいて政治をして下さいという最低限の要求を学生達は出していただけです。その背景には勿論中国共産党はもう駄目だ、社会主義は駄目だという今度の東欧などで起こったと同様なカウンター・レボリューションの潮流があったことは認めます。私はそれを評価するのですけれども、しかしながら学生達が要求として出したことは「共産党の幹部は腐敗だらけの特権を行使するのはやめて下さい。自分達の一族郎党だけが太るのはやめて下さい」ということだったのです。

もう一つは「なぜ鄧小平は未だに出てきてゴルバチョフと会うのか。鄧小平はもう国家指導者ではないではないか。国家主席でもない。党の総書記でもない。首相でもない。その人がすべてを牛耳るというのはやっぱり人治である。もう鄧小平さん、引き下がってくれ。」と言っているわけです。それに対して銃撃によってそれを鎮圧したというあってはならないことが起こったということが天安門事件の一つのポイントです。

もう一つのポイントは、単なる民主化運動ではなくって党内の権力闘争と結び付いたということです。しかも初めから権力闘争と結び付いていたのではなかったのです。それは正に去年の五月四日のアジア開発銀行の総会と五・四運動の記念日が一つの別れ道で、その次が五月十二日からハンストとゴルバチョフの訪中です。特に

ゴルバチョフが訪中して、鄧小平と中ソ関係の正常化を行って、その日の夕方趙紫陽・ゴルバチョフ会談がありました。そこで趙紫陽は鄧小平との訣別を宣言した。つまり、前にもお話しましたように党の最高機密である第十三回党大会時の秘密決議、即ち「中国に於いてはすべての重大事項が鄧小平同志の決定に委ねられる」という機密を漏らすことによって趙紫陽は大衆に、或いは全世界に自分の立場を明らかにしました。その途端にデモは百万人を越えて、五月十七、十八、十九日と経過して、十九日に戒厳令が出るまでは寧ろ趙紫陽の側が有利になっていきます。そして国務院や人民解放軍の中にもガタガタと崩れていく所が出てきた。そこで戒厳令施行になるわけですけれども、戒厳令施行についても党は二つに分れていました。結局私が色々分析して決定的だったのは五月十九日の夕方三時間ぐらい趙紫陽の動静が分からなくなりましたけれども、そこで彼は軟禁されてしまったと思われます。それをやったのは楊尚昆一族の人民解放軍の軍人達であったと思います。それ以来趙紫陽は今日に至るまで消息不明です。それは兎も角戒厳令が出てくる。戒厳令が出たけれどもなかなか事態は動かない。指導部内にも亀裂が出てくる。軍の中にも亀裂がある。そういう状況の中で学生デモが六月四日には三千名ぐらいしか残っていなかったにも拘らず十万の兵力を突入させて突破した。これはもう学生を鎮圧する為だけではなく残っています。学生を鎮圧する為であったらそれこそ公安部の部隊でも、民兵でも、武装警察部隊でも、やるわけですから、当初の力のバランスのままです。そして六月四日前後には北京近郊に三十五万もの正規軍が集結していたという事実があるわけです。これは正に中国が一種の二重政権状況の一步手前であったわけです。このことは中国共産党が天安門事件に関する公式の総括の中でも言っているのですけれども、そういう状況があったわけですから、逆には鄧小平や李鵬を軟禁してしまふことが出来ていれば、今頃中国は東欧に先駆けて民主化運動が進み、中

国共産党が解体し、新しい生れ変わった中国が出来始めることになっていたかもしれません。そういう危機があったからこそ天安門事件というのは深刻だったと思います。

でも、世界がこう動いているわけですから、今度起こった時には私はやはり行きかざるを得ないところまでいく可能性があるのではないかと思えます。勿論将来の推測は非常に難しいのですが、そこも我々考えておかなければならないと思えます。

## (2) 現体制の不安定要因は指導層の高齢化

また今後注目すべきことは香港の返還迄あと六年になったということです。一九九七年六月三十日を期して香港は中国に返還されるわけです。ですから今香港の人達も色々新しい議論をしています。香港基本法が出来ましたが、結局これも香港住民の政治的自由を許さないものです。さて今後香港も大変ですけれども、ただあと六年間今の中国の体制が持つかどうかです。この六年の内には鄧小平が九十を過ぎますから、そこまで鄧小平がああいう形で存在できるだろうか。しかし何と云っても中国は老人支配（Gerontocracy）の伝統があります。それから八老治国、つまり八人の老人、鄧小平とか、彭真とか、李先念とか、陳雲とかが国を治めていると言われてますけれども、何と云っても彼らは革命第一世代です。しかも自分達で兎に角革命をやり、嘗ては抗日戦線を戦い、国共内線を戦い、そして戦後の建設を行い、しかも文化大革命では毛沢東にやられた人達ですから、それをはねのけて今の体制を作ったという最後には強いところをもっている人達です。そこへいきますとゴルバチョフなどはレーニンから数えると革命第三世代ですから、もうレーニンは要らないと本心は思っているし、そういうことを時々言うわけです。東欧の指導者も亡くなった人以外は殆ど革命第二世代とか第三世代ですから、そうい

う意味ではそこが今の中国と違う所なのです。けれども、中国の場合にも革命第一世代が一方で退場が迫っているということと今の中国社会が非常に問題を持っているということの二つが不安定の内部的な要因だと思います。

## (3) 現体制を揺さぶる二つの外部的要因

### (i) 社会主義体制崩壊の世界的潮流

外部的要因は今後六年間の内に社会主義がどう変わるか、ソ連がどう変わるか、モンゴルがどう変わるかという事です。もっと変わると思うのです。

先般私共アジア調査会でエリツィンをお招きして彼の考え方を詳しく聞きました。

彼は「ロシア共和国はロシア共和国として外交権まで持つのだ。バルト三国は当然分離独立していいのだ。例えば日ソ間の北方領土問題はグルジア共和国などには責任は無い。これはあくまでもモスクワを統治していたロシア共和国と日本の問題であってその両方が協議すればいい。」ということまで言うのです。そのエリツィンは、マスコミ人気だけだと思っていたら、あれよあれよという間にロシア共和国の最高指導者になったわけです。私はエリツィンを見て、ゴルバチョフと比べて非常に革新的で大変な人材だけれども、政治家としてはまだ未熟だという印象を受けましたから今後彼自身はどうなるかという問題がありますけれども、しかしながらエリツィンのような時代になっていくと思えます。バルト三国もいずれはやはり分離していくでしょう。そうすると、ソ連というのもこれから二十一世紀にかけて英連邦みたいな連邦として残るかもしれない。けれども、そういう時代には各民族共和国はかなりの自治権を持つことになり、そして恐らく共産党の一党独裁ではなくなっていくでしょう。

そこまで社会主義が変わりつつある時に、今の中国のように飽く迄も「四つの原則」を固持するということができるのか。民衆の信頼が非常に高いならともかく、もうこれは地に落ちていくわけです。経済もいつ崩壊するかも分からないような状態になっているのです。

#### (ii) 台湾、香港に於ける経済的活力の昂揚

それからもう一つの外部的な要因は台湾や香港が凄い経済的活力を示しているということです。香港の場合は九七年問題がありますけれども、特に台湾はアジアNIEsの中で一番パフォーマンスがいいわけです。韓国が最近非常に注目されていますけれども、いかなる経済指標を比べても韓国よりも台湾の方がはるかにいいです。一人当たりのGNPも倍ぐらいいあるし、外貨準備高は飛び抜けていいし、貿易の実績も非常にいいです。それから経済の足腰が強い。韓国の場合はどこかまだ無理して自転車操業をやって肩を怒らせているような所がありますけれども、台湾の人達は円満な人達ですから自分達がこんなにいとは余り言わないけれども、中小企業が非常に強いです。ですからそういうことを見ますと、同じようにNIEsと言うけれども、一番いいのは台湾です。シンガポールと香港は所詮は都市国家ですから、国内市場は一つは二百五十万、もう一つは六百万と非常に小さい。私の従来の仮説で千五百万以上の規模を持てば国内マーケットだけでも大きなものになって、自立出来る。香港やシンガポールはその規模はありませんけれども台湾にはそういう規模があると思います。その台湾が李登輝体制になってから大陸政策というものを非常に賢明にやっています。台湾のプラスチックの会社が五十億ドルの投資を福建省にすることと色々台湾国内でも議論になっていましたけれども、李登輝はステップ・バイ・ステップで大陸に台湾経験を伝播することだという考え方です。もう政治反攻とか武力反攻の時

代では勿論なくて、これから経済反攻、社会反攻の時代であるという考えです。そういう状況がこれから益々進んでいくと思います。つまり台湾にとって有り余る外貨をどこに投下するかといえば、やはり大陸に投下したいという気持ちです。そこは同じ中国人同士ですから、日本の資本が出て行くのとは違う意味がそこにあると思います。そうすると華南一帯は台湾とか香港の経済的影響が益々強くなっていくわけです。北京に行きますと政治の世界なのですけれども、上海以南に行きますと全く違った経済的な実態としての中国がそこに動いているわけで、こういう所を見ても今のような共産党体制で統括するということは益々出来にくくなるのではないかという気がします。

#### (4) 中国に於ける農民社会と改革の関係

こういうふうに申し上げますと、いや中国は依然として農民社会だから農村は変わらないよという反論もありますけれども、この点について留意しておくことは、農村もかなり変わりつつあるということと、もう一つは、一番末端の広範ないわば文盲の層に属する人達は誰が指導者になっても、またどんな時代でも権力者が旗をあげればそれについてくるということと、だからといって、そのレベルまで政治意識に目覚めなければ中国は変わらないということではないと思うのです。逆に言いますと、文化大革命でもその層の人達までも目覚めさせたわけでもないということを考えますと、中国の将来についても、やはり大きな変動というものを、しかも我々の同時代の内に予測しておく必要があるのではないかと思えます。

## (5) 噴出して来た少数民族問題

もう一つこれに中国における民族問題も加えておいていいでしょう。中国の少数民族問題はソ連ほど深刻ではないと言われてきました。しかしながら最近では決してそうではありません。漢民族が約九〇%で少数民族は全部併せても一〇%ぐらいしかいないにもかかわらず、それがかなり大きな問題を起こしているのです。チベットでは漸く最近戒厳令が解除されましたけれども、ご承知の通り依然として問題が残っています。それから新疆ウイグル自治区では、去年の五月十九日、丁度中国の戒厳令が布かれた日で、ゴルバチョフが来た後ですから北京にジャーナリストがみんな集まってましたけれども、その日にウルムチで反乱が起き、大変な悲劇が起こっているわけです。それから最近新疆ウイグル自治区でウルムチ以外の所で反乱が起こっていることをついに中国当局が認めています。これは東トルキスタン共和国を創る策謀があったなどということを言っています。

最後には国民党側につきましたけれども、昔、世盛才という新疆ウイグルを統治した軍閥のような人がいます、あの辺に東トルキスタン共和国を創るといふ運動がありました。そういうような根がソ連側のウイグル族と一緒にあって出てきてます。

それからモンゴルが物凄く変わっています。その余波が内蒙古に行くかどうかです。内蒙古はフホト（呼和浩特）でもパオトウ（包頭）でも完全に漢人社会になっていきますけれども、しかしながら依然としてモンゴル族の問題が残っているということが今度分かりました。この数ヶ月の間に二回反乱が起こっているのです。それを『人民日報』が最近認めています。嘗て例えば日本軍部が徳王を擁立しようとしたこともありました、ここでも分断国家ですから、モンゴル大帝国を創るとか、或いはパン・モンゴリズムというところ迄はいかないにせよ、少なくとも今のモンゴル自身の変化の中で色々な余波が出てくる可能性があるわけです。

## (6) 中華人民共和国から中華連邦共和国へ

### ——統一のシンボルは孫文——

二十一世紀には中華人民共和国から中華連邦共和国へという問題が出てくるのではないかと私は思っています。或いは中国にもゆくゆくは複数政党制、例えば国民党も北京で選挙される時が来るかもしれないと見ています。勿論共産党は大敗北を喫するでしょう。そういう日が来るかもしれない。その時の統一のシンボルとしては恐らく孫文しかないのではないかと思います。そして中国が中華民国でもなく、中華人民共和国でもなく、各区域がかなりの自治権を持って連邦みたいな形になって経済的に競合したり相互依存関係を深めていくことができれば、中国もかなり良くなるのではないかと。それには今の政治システムは根本的に変わらなければいけないと思うのです。

## V 中国を取り巻く厳しい国際環境

### (1) 对中国制裁に関する米国と日本の相違

それから中国の国際環境について申し上げますと、依然としてこれは厳しいです。言ってみれば西側ではアメリカも基本的には制裁を解いてません。ブッシュ政権が仮に解こうとしても議会や世論は中国に対して物凄く強硬です。

それからこれは日本で問題になると思いますけれども、中国人留学生のビザが切れてくるのではなくて、パスポートが切れてくるのです。その時に明らかに日本で民主化運動にコミットした人達のパスポートの期限が切れ

た場合はどうするか、非常に問題です。ビザの更新、延長の問題でもアメリカ政府はエクステンションをどんどん認めていますけれども、我が国は日中友好関係を考える余りに、日本はそれをしないで、国へ帰れば明らかに摘発される学生を送り返すという問題も出てきますから、ここは何とか考えないといけないのではないかと思います。日本は自由主義とか民主主義とか言っているが意外にそういう所にも色々問題を持っているわけです。

## (2) 日本の改正入管法の問題点

入管法が改正されて、この六月一日から施行されましたがこれについてどう思われるでしょうか。私は別に社会党や共産党の人達と同じような立場では全くないわけですが、外国人労働者の問題や留学生の受入れの問題を含めて日本の国際化のあり方について、徹底的な議論をした上で決定したのならともかく、法務省や外務省の官僚レベルで決定が出てしまったけれども、そのお陰で物凄い余波が出ているわけです。私は消費税の問題なんかよりもこのことで国会や国民が沸いてくれなければ、日本は本当に二十一世紀に世界から尊敬され生き残れる日本にならないのではないかと思うのです。野党もだらしませんが、相も変わらず消費税問題にかかりあっている。もうそんな時代ではないと思います。

今まで台湾から来日する人は七十二時間ビザ無しで日本に滞在出来たものを、改正入管法では、今度全部ビザをとらなければいけなくなった。これを一方的に日本が通告してしまったものだから、台湾側は非常に硬化し始めています。今日本に来て一番おカネを落とすとしていくのは台湾の人達なのです。彼等は勿論日本に来ますけれども、アメリカや何処かにどんどん出ていきますが、その人達が七十二時間日本に立寄って買物をしていくわけ

です。これは日本の為になっているわけですが。それを他の不法労働者が日本に定着するのを排除するという目的でそうしてしまった。台湾は今不法労働者出国問題どころか、台湾自身が労働力不足でどんどんタイやフィリピンから労働力が入ってきている。台湾自身が物凄い高賃金になっている。そういう国の人が日本に来てそのまま居座るなどということはあり得ないのです。ですから官庁的な意志決定というものが如何に日本の国際化の上で妨げになるかという問題がここにもあるのです。特にアジアとの関係においてあるような気がします。そして、これらの問題を考えますと、日中関係は今後色々な課題を残していると申し上げざるを得ない。

## VI 無気味な程の超安定の北朝鮮

### (1) 金日成を教祖にした新興宗教の世界

そこでそれとの関連で中国がそういう状況だから北朝鮮はさぞかしもつとひどい状況かなと思っていました。今回の私の北朝鮮旅行は国際政治学会の団長として行ったわけですから、「お客さん」です。私もこれまで「北京にお客さんで行った人達の見聞録」というのは非常に表面的でしか見ていないではないか。一寸裏通りに入ってみたり、中国社会の中を見てもそんなきれいな事では済まされません。確かに黒塗りの車に乗って、いいホテルに泊って、そしてすべて案内付きでガイドされて、そしてレセプションをやって、万里の長城とかいうところだけ見てくれば、それは中国も素晴らしいと感ずるかもしれませんが、「そうではない」ということを言ってきた私ですから、今度の北朝鮮旅行では一週間居たとはいっても結局そういう旅行でしたから、私が申し上げることがすべて正しいと言うつもりはありません。また私自身朝鮮問題の専門家ではありません。ただ社会主義諸国を

あちこち随分見て来ました。キューバにも行きましたし、モンゴルも行きました。そういう社会主義諸国を比較することが出来るという目から、北朝鮮に行つて見る事ができたと思います。

これまでも社会主義を語る人達、チュチェ思想を礼賛する人は沢山いるわけです。例えば平壤に行きますと、日本の高名な人々が如何に金日成主席に対して敬愛しているかという本が出ています。その本の中には名前を申し上げてもいいような人も沢山いるわけで、こういう人達が北朝鮮に来て金日成主席を一生懸命礼賛しているのかなあと思うのです。

今回の私共の北朝鮮訪問団は、私が責任者となつていて日本国際政治学会東アジア分科会が自分達で人選して、しかも理事会で派遣を決めているわけです。北朝鮮訪問団の組成としては始めて北朝鮮側がピックアップしたのではない人、しかも東アジアの専門家を集めて行きました。団員には、例えば中国問題をやっている京都産業大学の小島朋之教授とか、若手の中国研究者、慶応義塾大学の国分良成助教授とか、そういう人達とご一緒したわけですが、自分達は「お客さん」として管理された旅行だということも十分承知の上で、しかしかなり意地悪にモノを見てきたつもりです。

北朝鮮側からは黄長燁という学者が代表になっていました。彼は朝鮮社会学者協会委員長、つまり科学アカデミーの総裁です。私自身黄長燁という人がそんなに偉い人だということを知らなかったのですけれども、大変な人なのだそう。その黄長燁と二度に亘つて延べ八時間半、膝を詰めて話しました。その他にも多くの学者、例えば社会科学院の副委員長とか、チュチュエ(主体)思想科学院の人達とか、ソ連の専門家なども一週間殆ど毎晩のように夜が更けるのも忘れて色々話し合つたのです。そして北朝鮮のルーマニア化はあり得るのかとか、金日成から金正日になった時にこのままの個人崇拜体制がいくのかという質問も全部したわけです。

その結果を申し上げますと、言ってみれば北朝鮮は二千万の国民という非常に統治し易い丁度台湾と同じ規模なのです。それが一種の新興宗教の世界になつていてと言つたらいいのではないのでしょうか。金日成を首領様と言つていただけます、金日成は正に教祖、あらゆる所が金日成神話、金日成崇拜です。例えばチュチュエ思想塔というのは花崗岩を使って造つてあるわけですけれども、金日成の七十歳記念に造つたということで、七〇かける三六五で二五、五五〇個の石で造つています。すべてそういう形です。これは将来金日成批判が起こつた時に、金日成は国家財産を私物化したという形で批判される証拠をそこに残していると、皮肉にも見えるような状況ですが、そこまで徹底した個人崇拜があります。それから恐らく中国共産党のように権力闘争がしょっちゅう表に出るような形ではないのです。勿論権力闘争はあるのでしょけれども、みんな粛清されているようです。

先程は申し上げませんが、中国共産党内で最近李鵬と江沢民の間の亀裂ではなくて、もう一つ天津市長をやつた李瑞環が色々問題を提起して李瑞環が第二、第三の胡耀邦や趙紫陽になる可能性がありそうですし、或いはひょっとすると将来天下を取るかもしれません。その時には趙紫陽の復活もあり得るかもしれません。そういう可能性も出てきているわけです。

## (2) チュチュエ思想の根底は儒教的権威主義

北朝鮮には中国のような形での権力的な角逐がなくて、正に金日成、金正日という親子の権力継承なのですけれども、言ってみれば、これについて私が今回北朝鮮で実に強く感じたことは儒教の影響なのです。儒教的権威主義体制、正に Confucian authoritarianism です。そのように考えると成程と分かる所もあるわけです。正に金日成王朝があつて儒教の倫理でやつていないかということ。現に黄長燁という人は大分苦学してこ

これまで地位を築き上げた人なのですけれども、お父さんは漢学者で、自分は子供の頃から「四書五経」「論語」などを読まされて育ってきたのです。やがて革命に参加したのですが、日本語が凄く上手で日本語で喋ってくれるのです。六十八歳です。彼は、洋の東西の哲学、思想に通じておりまして、その黄長燁だけを見ていると大変な人物でした。丁度台湾の李登輝とよく似ている。歳も同じです。哲学については、例えば京都大学の西田哲学や田辺元の哲学についても非常に造詣が深く、それからマルクスから始まってゲエテやトルストイやら凄く博学であることが分かります。そして、チュチェ思想というのは「人間を信じる宗教だ。」と言うから「それではこれはマルクス主義ではないのですか。マルクスよりも寧ろ観念論哲学、或いはフォイエルバッハではないですか」と聞きましたら彼は膝を叩いて「マルクスなんか全然つまらない。フォイエルバッハの方が遥かに偉大な哲学者である。」と言うのです。そういうことを北朝鮮の人が言うわけです。これは少し驚きなのです。恐らくチュチェ思想というのはそういう意味で、それが正しいかどうかは知らないけれども、マルクス主義、マテリアリズムではない、つまり唯物論を捨てようとしていると思うのです。その限りに於いてソ連がどうなるかと、中国がどうなるかと自分達は二千万がこんなに固まっているではないかということをや彼等は誇示しているわけです。それは大変な国際的孤立化なのです。

### (3) 北朝鮮のイメージはサナトリウム国家

しかしながら北朝鮮というのはやっぱり私もまだまだ分かりません。一方には「凍土の共和国」というようなイメージがあるわけです。そして、他方には「地上の楽園」、こんなに素晴らしい所はないというイメージがある。その両方共正しくないと思うのですけれども……。

『週刊朝日』が先週色々書いていましたが、その中に例えば去年ソウル・オリンピックに対抗して作った大きなメーデー・スタジアムについて、「これは幽霊屋敷だ」と書いてあるのです。少々脱線しますが、幽霊屋敷という廃墟みたいになってポロポロになっているというイメージがあるのですが、どういうつもりか、余りにも大き過ぎるということをおバケのようだと例えているのです。それは兎も角我々のグループの中の朝鮮話のよく出る人と私もそこへ行きまして、ビデオも写真も撮ってきているのですけれども、確かに凄い大きな物を造ったものです。十五万人収容の世界一大競技場です。そこで世界青年友好祭というのをやって、それに韓国外国語大学の女子学生が参加して今韓国で刑を受けているといういわくのある競技場ですから一糸乱れぬ新興宗教の運動会などのもっと大きなものと同じ感じなのです。他方、西海開門という大同江を堰き止める世界一大水利事業もあります。それから街の中に四十メートルあるというパリの凱旋門を超える六十メートルの凱旋門を造りました。それも全部金日成主席に捧げているのです。西海開門は灌漑等少しは生産に寄与するでしょうが、こういう直接生産に関係のない非生産的な公共投資が行なわれています。

平壤の街自体は非常に明るい感じですが。あちこちに高層ビルが建って、アパートもあります。これも今自慢だそうです。ただ本当に人が住んでいる気配がない。しかし、云ってみれば、そういう感じで平壤自身は大変な大都会、北京以上の大都会だと思いました。兎に角朝鮮戦争の時にすべて焼けてしまって、全部新しく造ったものだから古さがないです。そういう意味で非常に明るい感じがあって、そして私が一週間滞在した限りでは国中が或る意味では物凄く健康なのです。国中が保健所みたいな感じなのです。「サナトリウム国家」だと言っていいと思います。ですからもう一週間いると私もパニックをおこしたかもしれませんが、一週間ぐらいいるには丁度いい所だということです。ですからこの中で金日成首領様を称えて住んでいる民衆は大変苛酷なものかもしれません。

(4) 容易に崩れそうもない現体制の北朝鮮

——金正日が狙うソフト・ランディング——

そうなりますと、そう簡単に北朝鮮が崩れるということはないのではないかが私の見方です。日本の新聞社などは、この五月に金正日への権力の移行がありはしないか、それから下からの民主化運動が爆発するのではないかという期待があるのではないかと思えます。私は偶々北京に出かけた時に読売新聞に記事を書くことになったのですが、地方へ行く十二版にはその見出しが「民主化運動、期待薄」と書いてあるので、これは余りにも見出しが中味と違うということで、すぐ北京からファックスを入れ十四版の東京都内に配られるのには「民主化運動程遠い」として頂いたのです。そういう期待を持って北朝鮮を見るとはぐらかされる感じがです。今、金日成はかなり元気なようで、少なくとも彼があと四年やることになったのです。四年やるか、或いはあと二年経って辞めるかなのですけれども、彼の八十歳の誕生日が金正日の五十歳の誕生日だそうです。そこまで若しやるとすると、その後が勿論大変だと思えますが、その後にはルーミアのようなことが起こるかどうか、勿論起こる可能性も否定できないと思えます。然し、最近の中国共産党幹部はみんな特権を行使して自分の一族で支配しておりますが、嘗て金日成は非常に色々と粛清をやったらしいのだけれども、北朝鮮の場合、共産党の幹部が自分の懐を肥やすということはどうもないみたいなのです。金日成、金正日を含めて、正に権力が道徳化されていかりスマ的な支配の中にあるということです。

それからもう一つはルーミア化ということを避ける為に意外に金正日がソフト・ランディングを狙うのではないかということです。そうなると台湾の行き方と少し似てくるかもしれません。台湾も蔣介石は立派な方だったと思いますけれども、何と云っても独裁体制でした。それを、蔣経国が後継者になった時には蔣経国は非常に

暗い影があるとか、軍や公安をバックに出てきたとか言われながらも、彼は徐々に民主化してきました。そして特に蔣経国晩年には民主化を進めたわけです。そうすると、金正日も意外に自分がやはり革命第二世代だということもあって案外民主化を行ってソフト・ランディングをする可能性もあるのではないか。いずれにしても我が国とは今国交もないわけですが、もし金丸さんが訪朝するということになれば第十八富士丸の問題もなかなか難しい問題ですが、平壤の側はとにかく基本的にはソ連とも中国とも良くない感情を受けまして、やはりアメリカや日本に窓口を求めたいということです。

そこで実は私若干挑発の意味で台湾のことを平壤でうんと述べてきたのです。「台湾は経済もこんなに素晴らしいくらい持っている。李登輝はこんなに立派な人である。ソウルとモスクワはこんなに近くなる。(現に米韓首脳会談まで起こった。)中国も間もなくソウルとやるではないか。そうすると北朝鮮は孤立するから台湾とも関係を持つて経済的にもっと相互依存関係を深めることが大事ではないか。」ということを行いました。台湾なんて言うとうと怒鳴り出すかと思ったら、実に興味深く聞いていました。現に台湾から貿易代表のミッションが行われるのです。

話は変わりますが、私共は七月十一日から「アジア・オブ・フォーラム」というものを日本の知識人や財界の方の協力を得ましてやります。台湾から郭婉容女史が参加されます。彼女は今度経済企画庁長官に等しい経済委員会の主任委員になりました。日本から稲葉秀三先生がレセプションでお話して下さいます。それに中国からも代表が来る予定でして、ソ連からも来る。韓国からも来る。そこで北朝鮮からも来たかどうかとインビテーションを出しているのですけれども、ひょっとすると来るかもしれません。北朝鮮自身がアジアの中に入ってきたいということは当然考えているのです。ただ急速にそれをやると中国の二の舞になる。だから自分達は一步一步

ゆっくりやっぺいこうといてるようす。

いずれにしましても本当は北朝鮮に行つてみてこの国が明日にでもひっくり返るようなことを皆さんに報告できると、ドラマの筋書きとしては非常に面白いのですが、私の見た限りではどうもあそこは特殊ではないかというのが、大分意地悪に見てきた私の今ご報告できるところです。

以上をもちまして今日のお話を終えさせていただきます。どうも有難うございました。

### 質疑応答

○ 有難うございました。この会でも朝鮮問題、北朝鮮問題、韓国問題を勉強しておりますが、今日中嶋先生からかなりショッキングなご報告を戴きました。我々が常識で考えているように、或いは北朝鮮は明日にでも危ないのではないかという話もよく聞かされておりますが、今日は直接中嶋先生の目で、ご自身でご覧になってきたお話を伺いました。ご感想なりご質問をどうぞ。

○ 北朝鮮についての先生のお話を私も意外に思ったのです。非常に素晴らしい建物等を造っているというのは前にも聞いたのですけれども、経済的にと言いますか、国民の食生活や日常生活が非常に大変だというようなことを伺ったことがあります。現実にもそういう食生活を中心にした日常生活面はどんな状況なのでしょう。

中嶋 そこが一番重要な所だと思いますけれども、正直言ひまして私共も「お客さん」として一週間いた間に食生活の現場を見ることが出来なかつたのです。だから私の話はその点で冒頭で申し上げましたように或る意味では表面しか見ていないかもしれないということを前提に置いて頂きたいと思ひます。勿論私共の食べる物はかな

りいい物を御馳走になつたわけです。

デパートに行きまして、デパートの中を写真に撮つたのは我々のチームが初めてだそうす。NHKから頼まれて一人の団員が写真を撮つたのですが、ビデオは余りうまく撮れなかつたらしいのです。ところがデパートの中でも食品売場には行けなかつたのです。デパートの中にはないと言ふのです。他に見させてもらえればよかつたのですが、ついついその機会はなかつたです。食生活は非常に色々な報告がありまして、例えば、おかゆどころか、米ぬかを嚙つていたりとか、裏通りで菜っ葉が落ちるとそこへ子供が来て菜っ葉をそのまま食べているというふうな報告も一方あるわけです。ところが我々が見ている限りそういう現実はありませんでしたし、勿論平壤の人を見てもそんなに飢えてる感じはないし、昼間はピクニック、野遊会と称して、あちこちに団欒している風景もありますし、子供の写真も撮つてきましたけれども、決してそんなに飢えている感じではない。ですからこの辺がもう少し分らない所です。ただ我々にそういう現場を見せなかつたということ、それから中国に行くとか一杯野菜が溢れてますが、そういう感じではないですから食料は非常に不足していることは事実でしょう。ただそれによって凄く飢えているかという、メーデーの写真などもありますけれども、全員が飢えていたらメーデーとか野遊会などは出来ない筈ですし、その辺が少なくとも平壤は何とかなつていてる感じがしました。着る物は結構みんなカラフルな物を着ていました。デパートで普通のスポーツウェアのような木綿のジャケットが一〇〇か一二〇〜一三〇ウオンだったでしょうか。それは、彼等の一カ月の給料がそれ以上です。ですから買つてゐる人は非常に少ないのです。だけど物は一応出ていました。それから教育に非常に力を入れていることは事実で、例えばデパートなどでブラスバンドのトランペットとかトロンボーンとか、そういう物は割合に安くで大量に出ています。そういうのは恐らく先程言つたように国中が一種の新興宗教のような世界ですから金日成

を称える歌をみんなブラスバンドでやっているような雰囲気はあちこちにあります。

○ 韓国と北朝鮮の関係なのですが、東西ドイツの統一とは違って、北朝鮮と韓国の統一という問題は非常に難しいのではないかと感じるのですが、韓国の盧泰愚大統領がソ連と手を結ぼうとしているのはやはり北朝鮮と何とか統一の方向にいきたいというふう到我々には見られるのです。北朝鮮自身は韓国に対してどういふふうな感じ方をするのでしょうか。

中嶋 今北は南朝鮮とか南半分と言いますが、「南朝鮮人民はいよいよ反米愛国闘争に立ちあがっている。」という形で一生懸命自分に有利なように情報を流しているわけです。特にメーデーの式典に我々も出たのですが、メーデーの時には「南朝鮮人民の愛国闘争に対する講話」という特別のスピーチを労働党の書記がやっています。民衆代表に読ませていましたが、「今状況は非常に我に利する。何故ならば学生達は反米運動に立ちあがって在韓米軍撤退の運動が高まってアメリカ大使館にデモをかけた。それから南朝鮮の独占資本の代表である現代では労働者がついにストライキ、闘争に立ちあがった。」とやっているわけです。それは或る意味で今韓国で現に起こっていることでもあるわけです。

それから私共東京外国語大学にきている留学生とか、ソウル大学の先生に聞くと、韓国の学生、若者が最近北側を礼賛したり、北側に心酔したりする者が非常に多いようなのです。そういう状況が一方でありますので、北朝鮮は客観的に見れば国際的に孤立化しているのですけれども、自分達は決してそんなに不利ではないというふうなことを言っています。ですから今回の盧泰愚大統領とゴルバチョフ大統領との会談には非常に大きな衝撃を受けたと思います。恐らくそこまでは読み込んでいなかったのではないのでしょうか。ただ我々にはソ連も中国も対韓国交正常化という所まではいかないだろう、それは南朝鮮の期待でしょうということを書いてみました。

それから金日成については私もそこまでは質問しなかったのですが、ご承知のように金日成替え玉説というものがあられるわけです。ただ北朝鮮は革命 命博物館から何からすべて金日成一族はおじいさんの時代から英雄になっています。金日成については白頭山の英雄であり、それからその前の中国の根拠地でも英雄になっていて、それが凱旋して、如何に今の偉大な北朝鮮を造ったかとか朝鮮戦争の時も実際には中国の参戦が大きな意味を持っておりますけれども、中国の参戦などには殆ど触れてないのです。すべて自力でアメリカや南朝鮮をやっつけたということが出ています。そこを最近ご承知のように、ソ連から金日成の出生の由来をかなり暴露されたり、朝鮮戦争の時のことを暴露されているので、非常に北側はイヤだと思っっているでしょう。ただ謎が多いことは事実でしょう。

○ 私は六月四日前後香港におりまして、香港で丁度六月四日の天安門の一周年記念日の前夜にデモがあったのです。それで香港中の道路が全部埋まりまして全く動かないのです。去年の時は百万人と云っていましたが、今年は一寸と少ないようですが、何十万人という人で全く交通がマヒして動かなくなりました。そこで韓の人達の恐怖感みたいなものを目の当りに見てきたのです。それと同時に昨年は意識しなかったのですが、今年非常に気になったのは香港の人達、特に中流のマネジメント・クラスがどんどん脱出を始めています。チャンスがあればとにかく外国に逃げ出したい。カナダ、オーストラリア、アメリカ等へ行く。

今香港は表面非常に平和で全く変わらないので、底流としてミドル・マネジメント・クラスの人達はチャンスがあれば脱出するというようなことを始めています。やはり九七年の返還後、一体この香港には何が残っているのか、ひょっとすると中国が手に入れるのは中国に溢れている未熟労働者の塊みたいなものが手に入らないか、などと思ったのです。今のお話を伺いながら中国と香港との関係はどうなるのかという問題、もう

一つ非常にイヤな思いをしたのですが、香港の反日感情が感ぜられたのです。これは難民の受け入れに対する日本の態度が問題のようですが。

中嶋 私の感想を述べさせて頂きますと、今ご指摘になった点は非常に大事なご意見ではないかと思えます。特に香港について申し上げますと、このまま中国の体制が続いていくと、そういう形で香港はもぬけのからになって主要な香港の人材は海外に行ってしまうでしょう。ただ九七年まで中国の現体制が持つかどうかという程、中国大陸の方の状況が深刻になっています。それからもう一つの難民問題はやはり日本でうんと議論しなければいけないと思います。それから日本は政治亡命を受け入れない国なのです。亡命があるとみんな第三国へやってしまわうわけです。そういう所も今国際社会の中で日本は何だと見られています。これだけ経済が豊かになったにもかかわらず、厄介なことは全部アメリカへ押しつけているという感じですね。アメリカの場合には方励之は依然として北京のアメリカ大使館の中にとどまっているわけです。これは依然としてまだ解決ついてません。にもかかわらずアメリカはその点では譲りません。そういう本当の民主社会なり自由社会を背負っていくのだから凄く根本的な理念に於いて我が国の方は問い直さなければいけないのではないかと。そういうことがこれから凄く問題になりはしないか、つまり経済とか、安全保障の問題以上に、そうした人類の普遍的価値自身をどういうふうに考えていくかという問題が今後の我が国を取り巻く大きなイシューになっていくのではないかと最近私痛感しております。

(平成二年六月十二日講演)

発行日 平成二年九月十日

発行人 新井俊三

発行所 韓国国際関係基礎研究所

（株）エグゼクティブ・アカデミー

布

〒一〇六 港区南麻 一―五―一四―六〇二号

電話（〇三）四五二―二七七〇